

絵本で読み聞かせ

— 小・中学校の英語学習をつなごう

山本 玲子 Yamamoto Reiko
(京都教育大学附属京都中学校)

小学校英語の現場では、読み聞かせの実践が多く見られます。低学年向けのタスクだと思われる方も多いでしょうが、高学年から中学生にかけては、自我の成長もあってゲームやクイズ的な活動への積極性を失う時期でもあり、児童の知的好奇心を満たし、かつ英語の魅力を再発見するために、読み聞かせが効力を発揮します。初期学習者には、クラスルーム・イングリッシュを越えた豊かなインプットが必要です。絵本の読み聞かせの実践で見られた児童の反応を以下に紹介します。

題材 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* (Bill Martin and Eric Carle), *Five Little Monkeys Jumping on the Bed* (Eileen Christelow), *The Very Hungry Caterpillar* (Eric Carle) など

反応 低学年から慣れ親しんだ簡単な絵本を繰り返し読み聞かせる→以前より理解度が向上していることを実感できるため、幼児向け教材に対し拒否反応を見せる高学年児童も、絵本に対する反応は上々である。

題材 *The Magic Porridge Pot*, *Little Red Hen*, *The Story of Silent Night* など

※有名な話のため、様々な作家が手がけている。

反応 語彙・文法ともに難易度の高い物語を読み聞かせる→わずかでも理解すれば達成感を持ち、次はさらに理解しようとする意欲が向上する。

英語圏の子どものために書かれた絵本やライムは、リズムや押韻の工夫がされているものが多く、その魅力的な響きが特に児童の心をとらえ、訳さなくても意味を予想でき記憶にも残る(実際、覚えて口ずさむ児童がいる)ことに着目し、そこからより



読み聞かせを意図したビッグ・ブック。まとまった内容を豊かな表現で聞くことは、英語という言語を受け入れる素地を作ることにもなります。

効果的な読み聞かせの方法を考えました。

- ① タイトルの意味、登場人物などの最低限の情報を与えたあと、日本語での説明は一切与えず、物語全体を通して読み聞かせる。
- ② 教師はリズムや押韻を強調し、声の調子や大きさを工夫し感情を込めた読み方を心がける。
- ③ 児童同士の交流タイムを設け、想像した意味やわからない単語を出し合ったり、どこが面白かったかを発表したりする。
- ④ 教師は児童同士の交流で出てきた質問には答えるが、全体的な日本語訳は与えず、次の授業で再度、物語全体を通して読み聞かせる。

このように日本語訳をすぐに与えないことで、児童たちは物語を想像しながら耳をすませて聞き、語と語の境界や微妙な発音に注意を払うことになります。その結果、単語単位ではなく、チャンク(意味を成す句)単位で理解し丸覚えしていく様子が手にとるようにわかります。それは、形式から入る学習と異なり、場面と一致させて記憶に残すための理想的な学習ではないでしょうか。

中学1年生にも同じ本を読み聞かせたところ、未習語彙の意味をほぼ正確に予想することができ驚きました。また「自然と意味がわかって達成感があった」、「読み聞かせをしてもらうのは小学校以来で楽しかった」という声が上がっていました。生徒の意欲やそのレベルにより、題材の難易度を調節できるのが読み聞かせの利点です。小・中学校の英語教育をつなぐ意味でも、小・中学校の先生方に是非とり入れていただきたいと考えます。